

台 湾

台湾引き揚げの記

東京都 中村信子

私の生まれた昭和五年は、明治以来の近代教育史上、最もワリをくつた世代だという。

生まれて間もなく満州事変、小学校入学の年に日支事変、大東亜戦争勃発の昭和十六年十二月八日は小学校五年生であった。十八年女学校に入学したものの、教科書も替わって、音楽は敵国の音楽ということでヨーロッパの音楽が消え、このような音楽は戦意高揚や皇民化教育には役立たないということで、美しいメロディーやロマンチックな歌詞はなくなってしまう。

「サックリ、トントン、鍬の先」などの歌詞に凡庸なメロディーがついたのを歌わせられて、私は心の中で「ひどすぎる」と思い、涙すら流れてきたものだった。

強化された教練や薙刀の授業、校庭での畑づくり、軍夫に徴用された台湾人農家へ稲刈り奉仕、飛行場に動員された中学生たちの昼食のおにぎり作り、女学校に入学の時から胸当ての付いたモンペをはいて汽車通学をしていた。二年になると、警戒警報も多く、地域に生徒が集まって先生が出張授業されることになった。蘇澳（すおう）ではわが家と町の反対側の化成工場がにわか教室になった。

二学期からは動員で、蘇澳神社の奥の宮坂大隊に出かけて、山の鬼茅を刈りとって運び下ろしたり、（兵舎のカムフラージュ用）私の学年は上田中隊に行つて

中隊本部の手伝いをした。信じられないような話だが、非常識にも私は「コロ」と名付けた小型犬を抱っこして毎日動員先に通っていたのである。しかも級長であったのだ。

空襲警報が出ると、動員は中止であった。姉はこの頃僅かの時間をみつけてピアノの練習をしていたため、軍人になぐられそうになったことがある。姉にとっては進学の準備であっても、フィリップンまで戦場になってきた負け戦では非国民としか思われなかったのである。

蘇澳港に輸送船や油送船が入ると、必ずアメリカ機の空襲があり、船は沈んだ。港外へ出たとたん、待伏せしているアメリカの潜水艦に攻撃されることもあった。南方澳の漁港の空爆はとても激しかった。

蘇澳は東が海、三方は山に囲まれていたため、山すそのわが家の裏手に、町の横穴式防空壕が内地人用と台湾人用に二つ掘られていた。内庭に個人用の横穴式防空壕も掘ってあったので、状況次第でどちらかに避難した。休日には、どこにこんな兵隊さんが、と思

うほど大勢の兵隊でわが家の工場は賑わった。

いつ頃からか家の前をさらに行ったところに「ピー屋」といわれる慰安所が出来て、将兵が入りやすくなるようになった。

空襲警報の間を縫って工場は稼動し続け、裏の畑では南京豆や野菜類がつくられ、タケノコは大籠に溢れる。前の川ではコイやフナ、ウナギ、ドジョウが毎日バケツ一ぱいとれて、戦時下でもあまり食料に苦労した記憶がない。母はせつせとそれらを配っていて、私にはよく届け役をさせられたものだ。

敗戦の翌日、私たち動員学生は大隊本部で下川軍曹に「軍人が身命を賭けて戦ってきたのに日本は戦争に負けた。お前たち国民がダラシがないからだっ」と大声で延々と説教された。一人として泣く人のいなかった私たちだったが、次に馬越少尉が立って「長い間ご苦労さんでした。皆さんは再び学校へ戻って充分に勉強して下さい」とねぎらわれた時には、全員が祖国の敗戦を悲しんで涙を流したのだった。

たちまちにひるがえりはじめた中華民国の青天白日

旗、声高に語られ始めた台湾語、どっと出まわった豊かな食糧品、何年も口に来れなかつた食品が山のようになり積み上げられるようになった。これらの品々は、戦時中軍隊に納められていたのだろうか、それとも闇で売買されていたのだろうか。

戦争で台湾各地の清涼飲料水工場は炭酸ガスが入手出来なくなっていた。天然のガスを使用していたわが家の工場は、全島で唯一か所の製造工場となつて、夜業を重ねても需要に追いつかないほど繁盛することになった。

軍隊は武装解除され、引き揚げが何年のちになるかもわからないということで、台湾山脈の中に入っていた。食糧の自給のためと町の台湾人とのトラブルを防ぐためであった。

軍隊の貯蔵していた食糧はかなりの量であつたようだ。民間人のところに就職先が見つけられた者は、一人何俵という米を与えられて山を降りた。わが家には大西軍曹が四人の部下を引き連れて就職してきた。十俵以上の積み上げられた米俵を見て驚いたものであつ

た。

私は九月から女学校に戻つたが、校舎は中央に一発の爆弾を落とされていた上、軍人が大勢入つていた後始末とかで、教員社宅でしばらく勉強することになった。戦時下しか知らない私は、図画の先生のお宅で映画雑誌のスターの写真を見て、世の中にこんな今まで美しい男や女がいたのか、と目を見張つた。

内外の美女、特に白人女性スターのドレスや装飾品は、生まれて初めて見る豪華絢爛なものであつた。数々の画集にも感動した。

音楽もロッシーニの歌曲をまず教えられた時の喜びは忘れ難い。町はずれの一軒家だつたわが家では、母や姉に世界の名曲を教えてもらうことが多く、いつも家族で歌っていた。灯火管制が面倒なため、月夜には電気を消し、庭へ出て歌つたり踊つたりした。それが今や、新しい美しい曲をどんどん大つぱらに習っていくことが出来るのである。解放感は何にも替え難い喜びであつた。

女学校へ戻つた朝礼の時だった。後ろの台湾人のク

ラスメートが私にささやいた。

「信ちゃんと倫ちゃんだけは私たちをバカにしたことがないからいいんだけど、他の人は皆、台湾人をバカにしたから復讐してやりたいって言ってるのよ」と。この時私には生まれて初めて強烈な日本人意識が湧いて（もし仕返しをされるのなら、日本人の中に入って共に仕返しをされよう）と即座に決心した。と同時に、私にだって差別意識はある、ただ表面に出さなかつただけだ、というじくじたる思いも湧いてきたのだった。

男子の場合は異なっている。後年、当時の中学生の語ったところによると、同じ年頃の台湾人少年や青年に捕まって、町中でも中学校内でもずいぶん撲られた、と語っている。

台北駅でも一時、乗り降りの中学生たちを捕まえて石壁の前に整列させ、端からピンタを張っていく台湾人学生グループがあった。私の同級生の男子は弟妹の生活を支えるため台北市に物売りに出て、二回も撲られたそうだ。ピンタを張られると頭が後ろの壁に「ガ

ーン」と打ちつけられ、目がくらんで倒れそうだったとのこと。

日頃恨まれていた警察関係や民間人は報復された。満州や朝鮮と異なつて、一般の普通に暮らしていた日本人がやられることはなかつたようであるが、犯罪の捜査に当たつていた刑事や特高などで殺害されたもの、半死半生の制裁を受けた者はいたのだ。

蘇澳でも、郡長の家族や特に報復のおそれのある者がひそかに内地へ脱出していったあと、残つた刑事が身の危険を感じて地下に潜行したし、民間人でも、台湾人に暴圧を加えていたような人は報復を受けて、あわててかくれてしまった。

蘇澳は小さな町なので、台湾人のリーダーの人物次第ではもう少し平穏に戦後を過ごせたのかも知れなかつた。

しかし、戦時中「蘇澳漁民スパイ事件」で十人以上の台湾人漁民が軍法会議にかけられて処刑されており、しかもそれがデッチあげであつたから、台湾住民の怒りは大きかつた。それと、陳火土という、蘇澳の

日本への改姓名第一号で、子供を小学校へ入学させていたほどの親日家が、時世が変わって立場が逆転してしまったため、保身のため、日本人排撃の急先鋒に立った。日本名「浜崎」だったこの男は、日本人に恨みをもつ台湾人の先頭に立って暴力を振るい始めた。

松田刑事は彼から半死半生に痛めつけられて、日本引き揚げ後それが因で亡くなった。広場に引き出された初老の某日本人は、陳火土の皮の長靴で蹴とばされたり踏みにじられたりしながらも「日本は戦争に負けても大和魂では負けていない」と毅然としていた。

特高を（変装させて）沖繩へ逃がしたため生死をさまようほどの暴力を受けた私の友人の父親、老父の身代わりにしばられ蘇澳の町中を引きずり廻された小学校の教師、更に蘇澳で外科医として住民に信頼されていた台湾人医師も、親日派だということで陳火土はひどい制裁を加えている。

戦中下の親密な交際から、陳火土を信頼して隠れ家を教えたばかりに彼の命を狙うグループを手引きされ、危機一髪で救い出された元特高。また終戦後重油

の入手が困難なとき、南方蘇澳民に重油の現物支給と引き替えに魚の販売権を得た陳火土は、莫大な利益をあげながら日本人漁民に代金を渡さず、引き揚げの前には姿をくらましてしまった。ために引き揚げの準備も出来ず、引き揚げ時、許可された一人千円の所持金を持ち帰れなかった人たちが大勢いたことも、日本引き揚げ後私は直接聞き知った。「浜崎を見つけたら殺してやる」と日本人漁民は怒っていたが所詮太刀打ち出来る相手ではない。

無実で夫や息子を殺された「スパイ事件」の台湾人家族が怒り心頭に発して、復讐しようとするのは理解できるが、陳火土のように植民地時代に日本人ベッタリだった人間の豹変は、人間性の哀しさを深く思わせる。

彼はその後、国民党にいらまれて日本へ逃げてきたことがあったが、いつのまにか国民党の国会議員になった。彼は終戦直後の台湾人としては例外的だったかも知れない。

私は一人物のことを書き過ぎたかも知れない。人の

心の変化の一例として書いた。そのために台湾人全体が誤解されないことを願っているが。

危険がせまれば人は誰でも（私でも）保身のためにいやしくなることが出来るのだ。

シベリアの旧日本兵の収容所での「暁に祈る」事件は、日本人が日本人を死に追いやっている。非常時下には珍しい話ではないし、現在でも社会では自分の利益のために他人を不幸にして平気な人はいる。ただ敗戦時の動乱の時代には、個々の人間性がむき出しになった場合が多かったということであろう。

日本の統治時代、蘇澳の警察が（おそらく全島どこでも）窃盗程度の事件でも、台湾人の被疑者を自白させるために柔道で投げ飛ばしたり締め上げたり、種々の拷問を加えていたことは私の同級生が目撃している。剣道の稽古に武徳殿にいくと、容疑者（台湾人が多い）の苦悶の声がよく聞こえてきて、その現場をのぞくことも出来たという。

戦後すぐ、中国大陸から台湾人の啓蒙に派遣された人たちがいた。日本の植民地支配を批判し、台湾の進

路に対して熱いメッセージを宣伝していた。

ある日の夕食後、私はなんの気なしに町へ行ってみた。暗い官舎と対照的に廟の前が煌々と明るく、三百人を越す台湾人の男性ばかりが熱心に演説に耳を傾けている。好奇心の強い私は思慮もなく「なんだろう」と傍まで寄っていった。と「チップラン（日本人）」というささやきがサッとつたわつた。危険を感じた私は脱兎のように逃げた。後ろからピュンピュン小石が投げつけられた。石が当たらなかつたのはさいわいだつた。家にとび込んだ私は、五十年の日本統治の歴史を知らなかつたために「どうして台湾人は変わってしまったのだろう」と、裏切られたような淋しさの中に落ちこんでしまった。

台湾人の日本人への反感が薄れていったのは、中国兵が接収のために台湾へ上陸してきたからであった。「光復」に熱狂した台湾人は、祖国中国へ熱い思慕を寄せていたが、上陸した中国兵はあらゆる面で幻滅の悲哀を味あわせてしまったのであった。台湾統治者としてやってきた首脳層も末端の兵士も質が悪すぎて、

いたるところで台湾人のヒンシユクを買い「まだ日本人のほうがましだった」と思わせはじめたのであった。

そのうち、内地引き揚げの話で日本人は落ちつかなくなつた。台湾に移住して五十年になるわが家では引き揚げ先がなかった。父も祖父も死んでいる。父方の姉妹はそれぞれに台湾で所帯をもち、夫の実家へ引き揚げていこうとしている。内地の親戚は他人よりも気心の知れない遠い存在になつてゐる。そして母の両親も亡く、たった一人の弟も戦死してしまつてゐた。内地の財産は台湾に注ぎこんで残つてゐない。あまりにも台湾に根をおろしてしまつて途方に暮れてゐた母へ、軍隊を除隊して工場へ住みこんでいた大西氏が「妹が門司で大衆食堂をやつてゐるのでとりあえずそこへ」とすすめてくださつたのであった。

学校から在学証明書を受け、役所から五十万円の財産証明書を貰い、墓地から父と祖父のお骨を掘り出して白木の箱に入れた。一人千円の所持金と最低の生活必需品、ふとん一組、夏冬三着分の衣類などの準備をして、終戦の翌年三月十九日に基隆港を出発した。官

吏は終戦後給料がストップしたため、売り食いをしたり、行商人になつたり、人力車夫になつた人もいたから、この引き揚げは待たれたことである。しかし民間人として土着してしまつた人たちは台湾に骨を埋めるつもりであつたから、何から何まで失つてしまふ、という仕儀となつた。いや、中にはたくましい人もいて、反物を重ねてふとんをつくつたり、綿の中に貴金属をたくさん隠してもちかえつた人の話もきいてゐる。

桜島の火山灰でおおわれてしまつた鹿児島が、私の初めて見る内地であつた。私もふくめ、駅員や荷役作業などの労働者、農夫、労働者の女性たち、乞食、すべてが日本人のおどろき、心を痛めた台湾引き揚げ者は多い。こんな当たり前のことすら意外に思うほど、台湾では日本人は肉體労働はせず、台湾人が日本人の下位で働くことを当然視してゐたからである。

翌朝、鹿児島本線を北上した。沿線の都市や工場は骸骨のように爆撃の跡をさらしてゐたが、春先のみずみずしい田園は息をのむ美しさであつた。私は終日、

窓から目が離せなかった。こんもりした黒土、田んぼや畑を一面におおいつくしたピンクのれんげ草と菜の花の広がる先に雑木の林や藪があつて、微妙な若草色の濃淡の中に、濃緑の椿の葉と真紅の花が点在して風景を引き締めている。青空はやわらかで匂うようだ。(祖国はこんなにも美しかったのだ。これを見るだけでも帰国した価値がある)と思うくらいに感動しきっていたのだ。

しかし、四人の未成年の子供を抱えた母の顔は不安にとざされていたのを、今思い起こす。

夜に入って門司港駅に降り立った。構内には十数人の、汚れた顔や手足にボロをまとった被災孤児たちが、得意気に煙草をふかしながら、それでも無邪気にぶざけていた。

市街は廃墟でポツポツとバラックが建っている。旅館に二泊したあと、焼け跡だらけでどこにも貸家などがなかったのに、大西さんの妹の経営する食堂のすぐ近くの露路奥に建っていた物置のような六畳一間を借りることが出来て移り住んだ。幸運であった。

母はこの食堂で働くことになった。門司についた翌日、母が最初にしたことは、私たちの転校の手続きであった。「どんな境遇になっても、まずは教育」というのである。県立門司高等学校の校長も台湾からの引き揚げ者で、州立の台中中学校の修学旅行で蘇澳にあった私の祖父のつくった炭酸泉の見学に見えたことがあるとのこと。二人で大いに台湾を懐かしがったそうだ。

音楽への道をあきらめた姉は、区役所に勤めたが数日分の闇米にも足りない月給であった。インフレはますますまじかった。

日曜の朝六時から売り出されるタバコの行列に並ぶのは私たち子供の役目で、一人一個のタバコを買っては次のタバコ屋に走っていく。母がこれにわずかの上乗せをして売るのである。夜にはローソクのうす明かりのもとで手巻きタバコを作る。

姉はまもなく京都で女学校を経営している母の友人の所へ、ピアノの練習をさせてもらう条件で住みこんだが、女中仕事をやらされただけのようだった。引き

揚げ後半年もしないうちに、生活は完全に行き詰まり、ついで私と妹が、女学校の小使いをしながら勉強が続けられるよう、京都へ行く話になったが、出発前夜になつて断られ、結果的に一家離散をまぬがれた。

「両親揃っていても女学校どころじゃない御時世に、引き揚げの母子家庭がそこまで無理することはない」という批判の中で、母は家賃を節約するために引き揚げ者住宅に移ろうとしたことがある。大八車にささやかな荷物を積んで行ったその住宅は、真ん中の通路を挟んで六畳の板間がハーモニカのようにずらりと並び、隣りとの境界にはボロ布を下けているようなおぼつかないものであった。

母は、いったん荷物を下ろしたが、若い娘が三人もいるわが家には全く不向きな住所、と判断して「戻りましょう。死んだつもりでもう一度がんばりましょう」と来たばかりの道を帰つたのであった。

母は早朝から夜更けまで食堂で働き続けたが過労と心労から、夜中に心臓発作を起こして苦しんだ。そのたびに妹と二人、泣きながら医者を呼びに走つた。

私の学生生活も恵まれたものではない。配給では足りない食生活で、弁当の持てない日は校庭で水を飲んだ。なぜみんながお米の弁当を持参できるのか不思議であった。衣服にも不自由した。一着のみの上衣は、洗濯すると乾いてくれないことがあった。ナマ乾きの服を同級生が目くばせしあうのを昂然と胸を張っているのである。引き揚げ者はみな苦勞してははずだ。東北大学に行った台湾からの引き揚げ者M氏などは、真冬中、半袖シャツ一枚だけで講義を受けていた、と語っていた。

豆炭の配達で門司の町なかをリヤカーを引いた時は、さすがに恥ずかしく、知人に出逢わないよう祈つたけれど、学業を続けられた私は幸せであった。蘇澳から引き揚げた同級生の半数以上は、親の病氣や生活苦から、進学出来ずに、勤めに出たり、ダンサーになったり、温泉街で闇タバコ売りや靴磨きをしたり、あるいは荒地で慣れない開墾をしていたのだから。

母が食堂で稲荷ずしを売らせて貰えることになつたので、学校から帰ると、私はニンジンやゴボウやゴマ

の入ったきれいな稲荷ずしをつくるのが日課になった。好きな仕事だった。

母は禁製の外国タバコも売るようになった。ある日、MPがジープで乗りつけてきたのだった。

「外国タバコを売っているだろう。持ってきたなさい」
母は証拠品のタバコを差し出した。

「処罰されるのを知っていないのか、なぜこんなことをする」

「子供たちを育てるためです」

「夫を呼んできなさい」

「死んでおりません」

MPは通訳を通して訊問を重ねたが、最後に

「アナタ トテモカワイソ デモ タバコウツテイケナイ」

と日本語で言い、母のタバコを没収もせずに戻っていた。

後年、台湾の二・二八事件が、闇タバコを売って生活をしてきた女性が摘発を受けて、重傷を負わされたことに発したことを知って感無量であった。二・二八

事件では二万とも三万ともいう台湾人が虐殺されているという。

薄水を踏むようなその日暮らしの一年余が経って、家主が通りに面した家を貸してくれることになった。母が戸板半分に石けんなどを並べてみたところ、物のない時代であったからすぐに売れた。その売上金を持って小倉市の魚町に仕入れに行く。置くはしから売り切れる。自信を持った母は食堂をやめた。

お米の弁当を持って学校にも行けたし、姉も京都から帰ってきて英文タイピストになった。Y M C Aのピアノで練習している姉を見ると、とても安らぎを感じる事ができた。

母が町をさまよう戦災孤児の兄弟を引き取ったのもその頃であった。

やがて店は時流にのって繁盛し、間口五間、奥行十間近い大きな店になり、二階には洋裁店もこしらえた。私は学校から帰ると、試験中でも十一時の閉店まで必ず店番をすることにした。店番をしていると、つぎつぎと友人が訪ねてきて話がはずんだ。時には関門海峡

を渡って下関に仕入れに行く。潮風に吹かれながらイタリア歌曲など口ずさんでいると、苦勞など感じなかったものだ。

新制高校第二回の卒業生の就職状況はきわめて良かった。が求人条件は両親健在、という差別的なものであったから、私は働きながら夜間学校へ行く決心をして、反対を押しきって東京へ発った。

上京後、当方で毎日二万円前後の売り上げのあった母の店は、あいつぐ税金の攻勢と借金の高利、家主との契約の不備、連帯保証人になった法律的無知などから倒産、人通りの少ない小店に引き移った。

五十歳近い母は、四時に起きてモヤシ工場で重労働し、昼は店番をしながらレース編みの内職、そして夕食後は駅前の食堂で皿洗いの奥仕事をした。

妹や弟も年齢不相応の苦勞をしたが、雪だるま式に利息がついて、借金の山は崩せなかった。引き揚げ後、ムリにムリを重ねて子供たちを進学させた後遺症の借財は、親子協力して十年以上もかけて、払い終わった。

厳しい状況の中で、妹と弟が国立大学へ入ったのは

母の喜びであった。妹は就職予定であったが、教師のたつてのすすめで進学した。

母は六十四歳の時、上京して東南アジア学生寮で寮母兼主婦の仕事に就いたが、七十歳の時、経済的自立の出来る老後を目ざして書道教室を開いて独立した。母は結婚前、女学校で国語と書道の教師をしていたことがある。

母が育てた書道教師の応援を得て、八十九歳の今なお、教室には百人近い子供や婦人が通ってきている。

日曜には教会の方がキリスト教の礼拝の送迎を下さる。一週に一度の医師の往診、一週に二度のパートの家事手伝いもお願いして、とても上手に自分の老後の生活を充実させている。来客も多く、そのつど手料理でもてなす献身的な母を見てみると、私もあのようになりたたら、と願う。

たった一人で戦後のいちばん苦しい時期を乗り越えた母の苦勞は、私が書いたような単純なものではなかったかも知れない。

当時の三百五十万人に及ぶ外地引き揚げ者の死にも

の狂いの生活難との戦いは、ドン底に落ちた日本の国力の浮上に大きく貢献したはずである。

わが家の場合、母が人の三倍以上は努力したと考えられるが、門司という都会に引き揚げた偶然にも助けられた。そこには各種の仕事口があったからである。

大人になって気づいたのだが、私は女学校を中退して母を助ける立場であったのだ。勉強は一生のものだから学校は数年ぐらい遅れてもよかったのだ。精神年齢が低くて母や弟妹への思いやりが足りなかったことが、生涯の悔いとなって残っている。

祖父のはじめた竹中天然炭酸水工場は、私たちの引揚げたあと空前の大繁栄を迎えたということであるが、仲間割れや台風被害から草原に戻ってしまった。そして今また、世界に二つしかない炭酸泉として、台湾政府の開発政策で着々と復活しようとしている。わずか五十年足らずで、祖父のことも、かつての日本人企業の記憶も蘇澳で失われかけていて、人の盛衰のはかなさが心に滲みてくる。

引き揚げ後、内地で無一物から出発して生活の立て

直しに挑戦した人びとは、それぞれの重い人生を引きずってこの世を去って行きつつある。

引き揚げ時、子供時代であった私共四人きょうだいや、蘇澳の同窓生は、ほとんどが自分の家を持ち、子供にも相應の教育を与えていて、もはや引き揚げの傷は癒えて、日本社会の中堅を占めている。日本のように国が安定していれば、人は二代で立ち直ることが出来るようだ。私にとっても過去はもうなまなましく蘇ってくるものではなくなった。

引き揚げ者にこれからの使命があるとしたら、引き揚げ者を出すような日本の国策の反省と、植民地支配を受けた人たちの立場に立つた真実の記録を正しく知ることではないかと思う。

更に、異民族との接点に暮らした体験と視野の広さを活かして、国際平和に少しでも貢献すること、私たちの引き揚げ体験よりもっと冷酷な状況に置かれているアフリカなどの飢えに死んでいこうとしている子供たちに、地球市民として手をのばしていくことではないかと思うのである。第三世界と言われる彼らの苦悩

の生活は、かつて植民地として先進国に搾取され続けたことと深い因果関係があるのだから。

「台湾引き揚げの記録は、朝鮮、満州方面からの引き揚げ記録が悲惨で劇的な迫力にくらべるとあまりにも平穩で、わざわざ読むほどのこともない」と言った人がいた。

一民間人の五十年の植民地生活と引き揚げ、内地での再起を書いた私の手記も、そのような類いのものである。その程度のものである。

しかし、視点を変えて台湾引き揚げ者の記録を読んでいくと、敗戦後の台湾社会で個々の台湾人が知己の日本人に寄せた思いやりの数々、——日本内地の戦災の状態から台湾残留をすすめられた日本人は多いし、別れを惜しんで遠路訪ねてきたり、送別の宴を張ってくれた台湾人も多い。また山中の高砂族の青年たちが、山地勤務の警察官とその家族をぶじに下山させるため、ランチにかけようと台湾人が待ち構える中を護衛した話、日本人が食べるもの困っているとか、台湾人にいじめられている、という噂が高砂族の村に流れ

たため、心配のあまり、まる一日かけて食糧を担いで山奥から駆けつけてくれた高砂族の青年男女の話も残されている——や当時の数々の体験談、戦後二十年、台湾への往来が可能になると、またたく間に友情が復活したことなどは、日本人と同じ土地で同じ時代を共有した高砂族を含む台湾人の、人情の厚さや包容力、現実主義的、建設的的人生観などへの賞讃につながっていくものではないだろうか。日本の植民地統治が台湾人の歴史にとって屈辱や差別の多いものであったにもかかわらず、台湾人が理性的に日本人を日本内地へ送りかえたことを、日本の戦後史の記録の中に残すことは、友好の永続のためにも重要なことと思われるのである。

執筆者の横顔

中村信子氏は、昭和五年台北市生まれの六十二歳であるが、その年にはみえない、身も心も清々しく若い。一家の大黒柱の父親を亡くして、母親から育てられた、五歳のときからである。それにも拘らず暗い影もなく、花園に小鳥の鳴く声をききながら希望への夢を

抱いて成長してきた純情少女の面影を今もとどめて
いる純情家である。

幼少から学究に挑む習性で、台州高女に入学したの
は昭和十八年、学徒動員にあつたり、引き揚げて門司
高女に編入したが、学制改革などで二十四年に足かけ
七年目に卒業、次に翌二十五年、日本聖書神学校に入
学し、二十九年卒業まで五年を要し、更に三十二年に
武蔵野音楽大学に入学、六年目の三十七年卒業である。
正にクリスチャン学究肌の女神と尊称したい女性であ
る。

もとより、人生の幸せ、社会の平和は音楽にありと
志を立てた彼女は遂に中村音楽教室を設立し、二男二
女の子を育てながら、その運営に微笑を綻ばせてい
る声楽をもって世を明るくする信念にもゆる女性であ
る。

かつて、華やかな台湾生活にあつても、日本の植民
地施策に対し、その長短を究めていた単なる感情にお
ぼれざる理性派でもある、また台州高女から日本軍隊
に動員なって奉仕したが終戦にあい、当時の馬越少尉

から「ごくろうでした。皆さん学校に戻って充分勉強
して下さい」と声涙ともにくだる挨拶をきき、信子高
女生等も涙を流した博愛至情のクリスチャンを偲ばせ
る。

現在、日信管材株を設立し、従業員等の協力を得て
社長に就任し、労使協調のもと営業繁栄を来たしてい
ることは、幼にして父親亡きのちに母の手一つで育て
られた慈愛を忘れざる中村女史の人間の品性からであ
る。

(杜引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

闘病・終戦・留用・台湾を引き

揚げるの記

沖繩県 牧野 清

はじめに―台湾総督府就職

私は石垣島の登野城小学校高等科二学年を卒業し